

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

日本人によるペルーの考古学研究の重要性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ペーター, カウリケ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001657

日本人によるペルーの考古学研究の重要性

ペーター・カウリケ
ペルー・カソリック教皇大学
(関 雄二訳)

- | | |
|------------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 他のプロジェクト |
| 2. 方法論的な成果 | 5. 結論 |
| 3. 組織的な成功 | |

1. はじめに

約50年の歴史を持つ日本の考古学調査は、東京大学の教官によって始められ、つい最近までこの調査団は存続してきた(図1)。いずれにしても、ペルー考古学における他の外国調査団とは大きく異なる性格を持っているといえよう。この調査は、時間軸に沿って以下の5つの段階に分けられる。(1) 石田英一郎を団長として実施された1958年に始まる大規模な一般調査(石田他 1960)、(2) 泉靖一を団長として1960年から1969年にかけて行われたコトシュ及び他遺跡の発掘(Izumi and Sono 1963; Izumi and Terada 1966, 1972)、(3) 寺田和夫を団長として1975年から1985年にかけて実施されたラ・パンバ、ワカロマ、ライソン、セロ・ブランコ遺跡の発掘(Terada 1979; Terada and Onuki 1982, 1985, 1988)、(4) 大貫良夫を団長として1988年から1997年にかけて行われたワカロマ、クントゥル・ワシ遺跡の集中的な発掘(Onuki 1995)。そして、大貫の退官後、埼玉大学の加藤泰建が率いる現在という流れである。

本稿では、まずコトシュ遺跡に焦点をあて、建築の重なりと共伴する遺物について述べ、さらにこれらの成果と先述した諸遺跡との関連から、形成期(前1800年～紀元前後)の理解に対して日本調査団が示した特筆すべき成果について言及する¹⁾。次に、調査団の組織的な連携、および日本ばかりか、外国、とくにペルーにおけるその反響に論点を移す。そして最後に、上記の調査とは直接的な関連を持たない他のプロジェクトについて言及することとする。

2. 方法論的な成果

まず初めに、日本調査団が文明の起源研究に焦点を当て、それに沿って調査に取り組み、かつその姿勢を維持させてきたことに感銘を覚えることを表明しておこう。文明の起源は、テーヨ以来、ペルーの研究者も同様に多大な関心を払ってきたテーマであり、

常に考古学上、主要な論題の1つとなってきた (Tello 1942)。文明形成の開始時期、あるいは外部の影響から独立した文明形成を探究しようとする熱意からきたものであろう。

こうしたパラダイムに合う格好の事例として取り上げられてきたのが、チャビン・デ・ワンタル遺跡であり、その壮麗な様式であった。もっとも、これとて先行する文化が存在すると考えられてはいたが、まったく仮説段階にすぎなかった (Tello 1943)。そのため、テーヨが直感的にかなり古い遺跡であるとみなしたコトシュを、日本調査団の初期における最大の目標として選んだ点は、じつに幸運であった。中近東の「テル」と類似し、記念碑的な建造物が層位的に重なり合うことが明らかとなり、他の外国人やペルーの研究者もはっきりとは予見できなかったことを明示できたからだ。この建築には、これまで全く知られていない様式が見られたばかりか、共伴する物質文化も同様に異なるものであったため、これまでの知見を大いに揺さぶるものであった (図2)。しかし、この特徴は、決して例外とはいえず、後にワカロマヤラ・パンパ、クントゥル・ワシなどの遺跡の発掘によって確認されることになる。

次に、日本考古学特有の方法論の1つではあるが、建築や物質文化の変化に関する詳細な議論と調査報告 (コトシュでは分厚い2巻、後に発掘した遺跡でも随時刊行) を出版してきた点をあげておきたい (Izumi and Sono 1963; Izumi and Terada 1966, 1972; Terada 1979; Terada and Onuki 1982, 1985; Onuki 1995)。これは、ペルーにおける形成期研究にとって非常に意義深いものとなっている。残念ながら、このような詳細にわたる調査といったスタイルは、ペルーやアメリカの考古学者には採用されていない。彼らは、この分野に関わる研究者の大半を占めるといってよいだろうが、日本調査団とは異なる研究の方向性を持ち、主に理論に焦点をあてる傾向にある。また、調査の対象として山地よりも海岸の遺跡を好むようにも見える。

続いて、調査団による編年に関する成果について述べよう。土器を伴わず、しかしながら、きわめて目立った特徴 (建築技術、装飾、デザイン) を見せる記念碑的建造物が、周期的な増改築によって重なり合っている点を明らかにしたことは、形成期研究に対する重要な貢献であった。こうした建築の更新活動は、現在、ルス・シャディによって発掘が進められている中央海岸北部スーベ河谷のカラル遺跡においても確認されている (Shady and Leyva 2003)。さらに、コトシュの事例のように詳細は明らかではないものの、北部中央山地や北部山地の諸遺跡 (ピルル、ワリコト、ラ・ガルガーダ遺跡等) においても、建築の更新は認められる (Bonnier 1983; Burger and Salazar-Burger 1985; Grieder et al. 1988)²⁾。今後、この時期に焦点を当て、コトシュやその周辺地域で発掘を行えば、遺跡の相互関係や経済的基盤など社会の一般的な様相が明確になり、意義深い成果が得られよう。なお、詳細は明らかではないが、現在、チャビン・デ・ワンタル遺跡でも、その初期にコトシュと類似した建築が存在したという仮説が提示されている (Rick personal communication)。

また、ラ・パンパ、ワカロマ、セロ・ブランコ遺跡などの発掘では、先土器時代に続く、中央アンデス最古の土器の問題も明らかにされた。ことにコトシュ遺跡のワイラヒルカ様式(図3)は、あまり明確とはいえないが、ドナルド・レイスラップによって示唆された中央セルバとの関係を持つ特殊なものである(Lathrap 1970)。いずれにせよ、これら初期の土器様式は、石造美術(ラ・パンパ遺跡など)や明確な建築と共伴するが、いわゆる「チャビン様式」とは異なる点が特徴である。確かに起源は先土器時代にさかのぼれるだろうが、この土器が登場する時期には、既に建築と美術様式において地域的な多様性が存在するようである。しかし、多様的とはいえ、北部ペルーの海岸部や山地の遺跡間の比較は可能である。確かに、こうした遺跡の情報は断片的であり、北部地域全体の複雑性は十分に理解されていないものの、北部以外の地域となると、遺跡を関連させるべく比較を行うことすらむずかしいのである。

「チャビン様式」に先行する時期は、コトシュ、ワカロマ、ライソン、クントウル・ワシ遺跡の複雑な層位の中でも確認された(Izumi and Sono 1963; Izumi and Terada 1966, 1972; Terada 1979; Terada and Onuki 1982, 1985; Onuki 1995)。この時期では地域的な表現がより多様化し、それぞれの地域で独自の伝統が見られるようになる(コトシュ・コトシュ期、後期ワカロマ期等)。こうした中で、コトシュやラ・パンパなどの遺跡においてのみ、神殿建築や共伴する物質文化の中に、「チャビン様式」として知られている特徴が後に現れるのである。クントウル・ワシ遺跡では、状況はやや異なり、こうした外部の「影響」は、チャビンではなく、クピスニケと呼ばれる海岸地帯の文化から来ている。この点は、クントウル・ワシ期の建築と共伴し、壮麗な副葬品を伴った一連の埋葬において確認されており、しかもその副葬品は、北海岸の盗掘墓から出土する遺物とみごとに一致を見せている(Onuki 1995)(図4)。

昨年のチャビン・デ・ワンタル遺跡の発掘では、バーガーがハナバリウと呼ぶ土器とクントウル・ワシの土器の共伴関係が確認されたようだ(Rick personal communication)。これらの理解は日本の調査団の成果によるものであり、従来考えられてきたような画一的な「ホライズン」と呼ばれる現象が存在したわけではなく、この時期に地域間の相互関係が強かったことを示唆している³⁾。

最後に、この後の時期について論じよう。「チャビン様式」に特有な特徴は存続するものの、それ以前に見られた地域的な伝統へと回帰したと考えられる。コトシュにおけるイゲラス期やカハマルカにおけるライソン期のような後の時期は、形成期の後、あるいは続形成期として位置づけられるのである。

これまで述べてきた4つの時期(土器製作開始期、先チャビン期、チャビン並行期、続形成期)は、それぞれサブフェイズに細分される可能性はあるものの、調査した遺跡での層位データを基礎とした、しっかりした編年の枠組みといえ、これにより相対的な比較など厳密な考古学的考察が可能になったのである。この一連の方法は、他の地域にお

いてよく見られる様式に基づく編年とは全く異なるものである。様式編年は、資料を時間順に配列するセリエーションという方法に依拠しているのだが、一見、明確な年代をコントロールしているように思わせているだけである。いずれにしても、こうした成果は、日本の調査団によって行われた長期的な発掘に基づくものであり、形成期の理解にとって大変重要であるといえる。

3. 組織的な成功

調査団の他の特徴として挙げられるのは、既述の目標に立ち向かう考古学者集団の継続性と団結性である。多くの団員は、幾度となく調査に参加した。亡くなられた方もいるが、団長以外では、曾野寿彦、松沢亜生、狩野千秋、友枝啓泰、宮崎泰、丑野毅の名前を挙げる事が可能である。我々が敬意を捧げる藤井龍彦は、3次に渡り、調査に参加した（コトシュ、ラ・パンバ遺跡）。1975年からは加藤泰建、1979年からは関雄二が継続的に調査団に加わった。松本亮三は、1979年から1988年にかけて調査に携わり、この後、坂井正人、井口欣也、鶴見英成、渡部森哉、芝田幸一郎、土井正樹らが、自身の調査も同様に進めながら、調査に参加した。この長いリストでさえも、調査に参加したペルーと日本の学生を全て挙げることは不可能である。クントゥル・ワシのプロジェクトだけでも、考古学者、学生の参加は優に40人を超える。

大貫良夫は、現在、実質的に調査団の全ての活動に携わった唯一の人物である。だからこそ、先達の関心を完璧に理解し、それを学生たちに伝え、育てることが可能であった。彼は、調査団長を務めた長い期間、そしてその後も、日本とペルー、あるいは外国の研究者との橋渡しとなることにその手腕を発揮してきた。一般に考古学者の間に摩擦があることはよく知られており、その意味でも、とても困難な仕事である。このようにして、藤井を含め、初期の調査に携わった研究者との良好な関係を維持してきた結果、彼らの学生もその例に従い、良好な関係を築くこととなった。また、これらはさらなる効果をも生じさせた。かつての学生たちが日本の大学や博物館で職を得たのである。そこでは、引き続きペルー考古学へ関心を寄せながら、今度は自らの学生に教え伝えている。大貫が退官した後の東京大学では、こうした方向性は失われたものの、埼玉大学において、加藤泰建のもと、新たな調査の中核が形成されている。さらには、大貫をはじめとした調査団のメンバーが、日本各地で、定期的に一般向けの講演を行い、日本語で刊行物を出版し、発掘された遺物の展示活動を行うことによって、人々の興味を惹くことにも成功している。

ペルーでは、カハマルカ県で実施された長期間にわたる調査によって、住民との間に非常に親密な関係が築かれた。この持続的な関係によって、これまでの調査とは異なる局面が生み出されたのである。とくにクントゥル・ワシ遺跡の調査では、地元住民が、

これまでないほど密接に、自らと過去（歴史）とを結びつけるという、ある種のアイデンティティが形成された（図5）。また、ペルー人との協力関係は、最初は日本語、その後英語で出版されてきた刊行物が、最近ではスペイン語で出版されるようになったことから明らかである。現在、若い世代の日本人考古学者たちは、ペルーの研究者とともに調査を行っており、中でも渡部森哉、芝田幸一郎は、カソリック大学の客員研究員としても活躍している。さらに、カソリック大学考古学専攻の多くの学生が、調査団の様々なプロジェクトに携わっていることも付け加えておこう。

このように、調査団による成果は、学問の分野だけに限られるものではなく、地域、地方、国家、国際といった諸レベルでの政治の面でも評価されよう。今日あらゆることに影響を及ぼすグローバリゼーションと対峙する途上国の社会状況を考える上でも重要なのである。

4. 他のプロジェクト

本稿を閉じる前に、簡単ではあるが、調査団とは独立したものとしての他のプロジェクトについて言及しておく。まず挙げられるのは、島田泉による調査である。彼は、京都に生まれた後、アメリカに渡り、そこで教育を受けた。現在はアメリカで暮らし、職も得ている。25年にわたり、ペルー北海岸ランバイエケ河谷で栄えたシカン文化（後750年～後1375年）の研究に従事した。多くの著作で表されているように、幾度かの調査によってシカン文化に関する全体像を得ることに成功している（Shimada 1990, 1995, 1997）。なかでも、巨大かつ複雑な手つかずの墓、あるいは一部盗掘を受けていた墓の発掘は、日本の援助によって実施された（島田・小野 1994）。

彼の研究のスタンスは、アメリカで一般的なプロセス考古学を軸とするため、日本調査団のスタンスとはやや異なる。報告に関して解釈が重要視されており、豊富な遺物があっても網羅的な提示は行っていない。

1982年に私がカソリック大学で教鞭をとるようになって以来、島田は考古学専攻との密接な関係を維持しており、昨年よりリマの南にある有名なパチャカマ遺跡で大プロジェクトを実施し始めた。これまでカソリック大学の多くの学生が島田の発掘に参加しており、中には副団長として発掘に携わる者もいる。その中の1人であるカルロス・エレラは、現在、日本の財政的な援助で建設されたフェレニャフェ市にあるシカン博物館で館長職についている。

東海大学の松本亮三は、かつてカハマルカで先述の調査団のメンバーとしてカハマルカ文化の遺跡を発掘し、それについての重要な報告を行っている（Terada and Matsumoto 1985; Matsumoto 1993）。また1996年から1998年にかけてランバイエケ河谷で後期中間期の遺跡の発掘を、さらに近年ではカイエホン・デ・ワイラスで踏査や発掘を行っている

(横山他 1999)。先述したリストの中で若干触れたように、現在、調査団の若い世代の考古学者たちは、以前は対象とされなかった地域の調査を含め、形成期にとらわれることなく、独自のプロジェクトを展開している。もちろん、形成期研究が重要なテーマであり続けていることはまちがいない。

最後にもう一つ、他のプロジェクトについて述べる。クスコ地方（マチュピチュやピサック遺跡）では、1999年と2000年の2年にわたって、九州大学の楠田哲也を団長として調査が行われた。この調査は考古学者ではなく、土木の専門家による古代社会における水の管理に焦点を当てた調査であり、特殊な事例である（以前に、パキスタンのモヘンジョ・ダロ遺跡の調査を実施）。この事例について述べた理由は、他の学問分野を専門とする日本人研究者にとっても、アンデス文明が非常に興味深いものであるということを変更して示すためである。

5. 結論

ペルー研究の長い伝統を持つドイツのように、比較的短期間の個人研究という特徴を持つ諸外国の調査団——パルパ地方におけるマルクス・ラインデル率いるKAVA（ボン的一般・比較考古学委員会）によるプロジェクトは、中・長期間のプロジェクトであるが——との差異は、日本の調査団が先行する研究の歴史を持たずに、見事な技量を備え、驚くほどの知的装備を持った専門家の一団としてペルー考古学界に突如現れ、しかも当初から卓越した成果を上げたことである。しかし、特筆すべきは、今日まで持続され、恐らく未来においても続くであろう研究にかけける情熱のもと、目的を達成するために調査を継続的に実施し、常にデータをまとめ、その重要な成果を出版してきたことにある。それゆえ、古代ペルー史の解明に重要な貢献を果たす彼ら一人一人に対し、称賛の念を禁じ得ないのである。

注

- 1) 形成期の年代は、ここにあげたものが一般的であるが、近年、日本調査団は、神殿の役割を重視し、その登場をもって形成期の始まりとする編年の修正を提言している（加藤・関 1998）。これによれば前2500年～紀元前後となる。
- 2) コトシュ遺跡の遺構に認められる、上塗りが施され、段差を持った床面、床中央に切られた炉、部屋の外にのびる煙道などの特徴は、ピルル、ワリトコ、ラ・ガルガーダでも発見されている。このため近年では「コトシュ宗教伝統」の名でまとめられることが多い（Burger and Salazar-Burger 1985）。
- 3) 「ホライズン」とは、一つの「文化」が一定の地理的領域の中を比較的短い時間で広がった場合に用いられ、この現象の狭間の時期、すなわち多様な文化が併存していた時期を「中間期」と呼んだ。こうしたホライズンが中央アンデス地帯では、古い順にチャビン、ワリ、インカの3つの

文化の場合に当てはまると考えられ、それぞれを前期ホライズン、中期ホライズン、後期ホライズンと名付けられた。さらにホライズンにはさまれた時期を前期中間期、後期中間期とし、前期ホライズンの前は草創期、さらにそれ以前は先土器時代と命名して I から VI まで6つの時期に細分した (Rowe 1960)。

文 献

Bonnier, Elizabeth

- 1983 Piruru: Nuevas evidencias de una ocupación temprana en Tantomayo, Perú. *Gaceta Arqueológica Andina* 2, 8-9.

Burger, Richard L. and Lucy Salazar-Burger

- 1985 The Early Ceremonial Center of Huaricoto. In C. B. Donnan (ed) *Early Ceremonial Architecture in the Andes*, pp.111-138. Washington, DC.: Dumbarton Oaks.

Grieder, Terence, Alberto Bueno Mondoza, C. Earle Smith, Jr. and Robert M. Malina

- 1988 *La Galgada, Perú: A Pre-ceramic Culture in Transition*. Austin: University Texas Press.

石田英一郎・泉靖一・寺田和夫他編

- 1960 『アンデス——東京大学アンデス地帯学術調査団1958年報告書』東京：美術出版社。

Izumi, Seiichi and Toshihiko Sono (eds.)

- 1963 *Excavations at Kotosh, Peru 1960*. Tokyo: Kadokawa-Shoten.

Izumi, Seiichi and Kazuo Terada (eds.)

- 1966 *Excavations at Pechiche and Garbanzal, Tumbes Valley, Peru, 1960*. Tokyo: Kadokawa-Shoten.

- 1972 *Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. Tokyo: University of Tokyo Press.

加藤泰建・関 雄二編

- 1998 『文明の創造力』東京：角川書店。

Lathrap, Donald W.

- 1970 *The Upper Amazon*. London: Thams and Hudson.

Matsumoto, Ryoza

- 1993 Dos modos de proceso socio-cultural: El Horizonte Temprano y el Período Intermedio Temprano en el valle de Cajamara. In L. Millones and Y. Onuki (eds.) *El mundo ceremonial andino* (Senri Ethnological Studies 37), pp.169-202. Osaka: National Museum of Ethnology.

Onuki, Yoshio (ed.)

- 1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos sitios del Formativo en el norte del Perú*. Tokyo: Hokusen-sha.

Rowe, John

- 1960 Cultural unity and diversification in Peruvian archaeology. In A. F. C. Wallace (ed.), *Men and Cultures Selected Papers*, 5th International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences, pp.627-631. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Shady, Shady and Carlos Leyva (eds.)

- 2003 *La ciudad sagrada de Caral-Supe: Los orígenes de la civilización andina y la formación del estado prístino en el antiguo Perú*. Lima: Proyecto Especial Arqueológico Caral-Supe.

Shimada, Izumi

- 1990 Cultural continuities and discontinuities on the northern north coast, Middle-Late Horizons. In Michael E. Moseley and Alana Cordy-Collins (eds.) *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chinor*,

- pp.297-392. Washington, DC.: Dumbarton Oaks.
- 1995 *Cultura Sicán: Dios, Riqueza y Poder en la Costa Norte del Perú*. Lima: Fundación del Banco Continental para el Fomento de la Educación y la Cultura.
- 1997 Organizational significance of marked bricks and associated construction features on the north Peruvian coast. In Elisabeth Bonnier and Henning Bischof (eds.) *Arquitectura y civilización en los Andes prehispánicos* (Archaeológica Peruana 2), pp.62-89. Mannheim: Reiss- Museum.
- 島田 泉・小野雅弘
- 1994 『黄金の都シカンを掘る』, 東京:朝日新聞社。
- Tello, Julio C.
- 1942 Origin y desarrollo de las civilizaciones prehistóricas andianas. In *Actas y trabajos científicos del 27 Congreso de Americanistas, Lima 1939, I*, pp.589-720. Lima.
- 1943 Discovery of Chavin culture in Peru. *American Antiquity* 9(1), 135-160.
- Terada, Kazuo (ed.)
- 1979 *Excavations at La Pampa in the North Highlands of Peru, 1975*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Terada, Kazuo and Yoshio Onuki (eds.)
- 1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1985 *The Formative Period in the Cajamarca Basin, Peru: Excavations at Huacaloma and Layzón, 1982*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1988 *Las Excavaciones en Cerro Blanco y Huacaloma, Cajamarca Perú, 1985*. Tokyo: Departamento de Antropología Cultural, Universidad de Tokio.
- Terada, Kazuo and Ryoza Matsumoto
- 1985 Sobre la cronología de la tradición Cajamarca. In *Historia de Cajamarca*, pp.67-89. Lima: Instituto Nacional de Cultura, Departamental Cajamarca, Corporación de Desarrollo de Cajamarca.
- 横山玲子・松本亮三・ルセニダ・カリオン
- 1999 「後期中間期におけるチョンゴヤベ地域の発展と冶金活動——ペルー北部, カンパメント・デ・パレドーンエス遺跡の発掘を通して」『古代アメリカ』2:1-38。

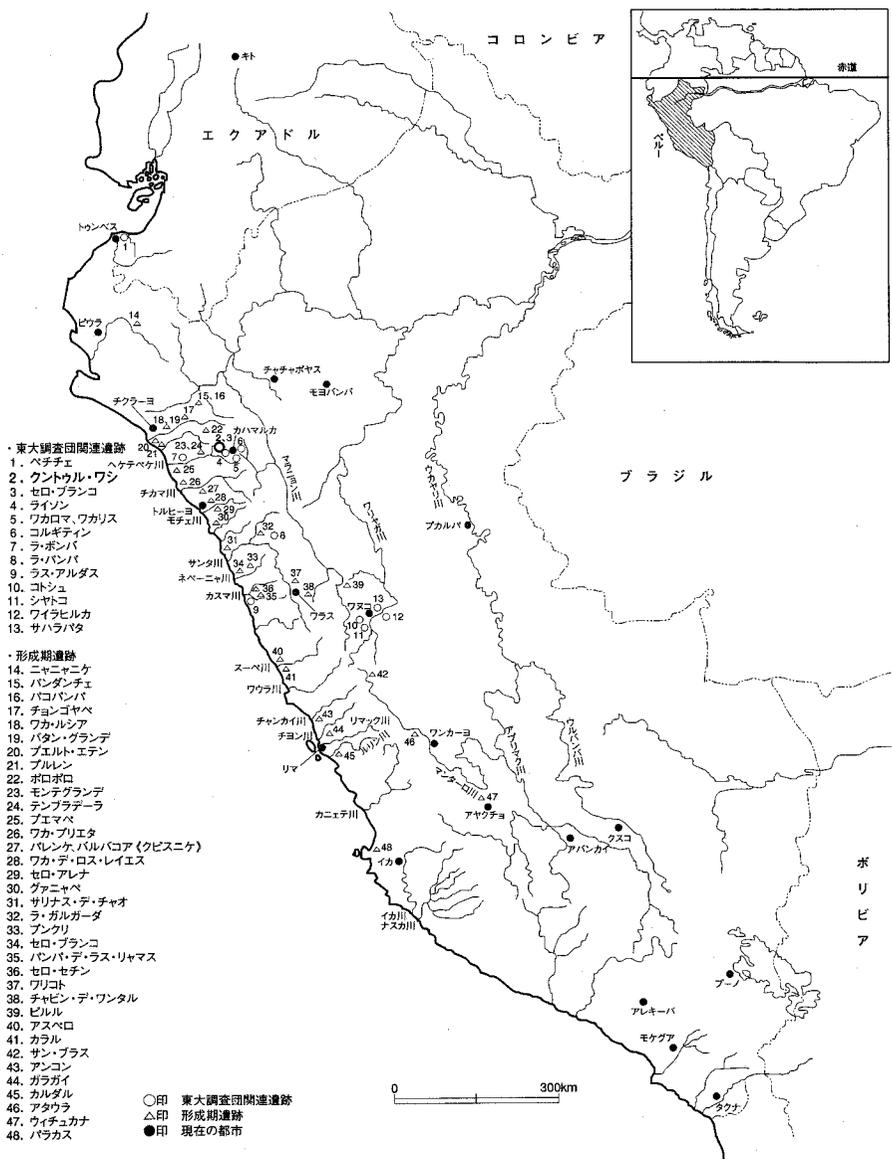


図1 東京大学調査団が実施した発掘調査地と形成期の主な遺跡



図2 コトシュ遺跡ブランコ神殿
段差をもった床や内壁に設けられたニッチが見える。(撮影 東京大学アンデス調査団)



図3 コトシュ遺跡より出土したワイラヒルカ期の舟形鉢
(撮影 東京大学アンデス調査団)



図4 クントウル・ワシ遺跡の墓に副葬されていた鐘形土器
北海岸のクビスニケ様式に属する。(撮影 東京大学アンデス調査団)



図5 クントウル・ワシ博物館とそれを運営する文化協会の会員